

## 新しくなった西国街道

ふるさと大竹を通る、昔からの主要道路であった山陽道。

江戸時代には、「西国街道」と呼ばれ、幕末・長州の役で、幕府軍・長州軍の兵が駆け巡ったこの街道も、明治時代になって経路が大きく変わりました。

### 新道（旧国道）建設

明治になり、関所や番所の廃止に続いて、物流の統制も解かれ往来が活発になってきました。

それには道路の整備が必要で、主要道路の改良や新設が全国的に展開され、西国街道の広島・大竹間も明治6年に、和田吉左衛門・小泉甚右衛門（草津村）など有志の企画によって、海岸沿いに新道建設が進められることになりました。

地域の経路は東から、大野鳴川海岸沿いを経て、馬ためしなどの山裾海岸を迂回して玖波の町に入り、明治新開を通り小方の町に入りました。そして、飛石を通り、立戸・油見・大竹大和橋を経て和木に入り、新港に至る幅員3間（約5.5m）の平坦な道の計画でした。

工事は廿日市までは順調に進みました（同7年竣工）が、廿日市・大竹間は難工事が多く市域では馬ためしらの山裾や飛石海岸の工事などは容易に進みませんでした。

例えば、工事途中の飛石の道路取付工事は、工事中の同年8月に台風で石垣が崩れ、土砂も流れるなどしたのです。

その後、和田吉左衛門が工事担当者取締りに任命され、工事は本格的に進められました。馬ためしは隧道（トンネル）を掘り、小瀬川には大和橋を架け、明治13年2月、廿日市・大竹間の新道が完成し、同月16日広島県令はその通行を許可しました。

総工費は三万円。うち地元負担が二万四千元で大部分が村人の寄付で賄われました。

新道完成で、市域でも大八車・人力車が使われるようになり、明治中期には荷馬車、昭和になり路線バスも走るようになりました。

昭和26年市域の国道2号線が開通するまで、幹線道路（旧国道）としての役割を果たしていました。



権現橋の親柱

### ④権現橋

かつて、鼻操川には立派な石造りの「権現橋」が架かっていた。

現在、川は6本の道の交差点の下に埋まって暗渠となり、橋の姿も消えてしまった。橋の名は、近くの「武昌大権現」を祭った権現山に由来。

その山も、大正期の大倉組山陽製鉄所や、昭和期の大竹海兵団の用地造成で削り取られ、跡形も無くなった。

単なる地名となった「権現橋」の親柱の1基が、近くの民家の軒端に保管設置されている。



初代大和橋



2代目大和橋

### ⑥昔の大和橋

明治13年、廿日市・大竹間が全線開通し、同時に県境交流の懸け橋として、木製の橋（2間半）が架けられた。そのため、この界隈は一段と賑いを見せた。

大竹・和木両村の連携を深めるため両地区の頭文字を組み合わせ「大和橋」と名付けた。そして、大正15年2月、市域では初めての永久橋（コンクリート橋）へと生まれ変わった。

### ③壹里標

新しい国道には、一里塚の代わりに御影石造りの「壹里標」が各地に設けられた。

その一つが、大竹市立図書館の横に保存されている。

裏面に「明治18年8月油見村 上岡寿平」と記され、地元の有志が寄贈したことがわかる。側面には「広島から9里」「大和橋まで13町・・・」と刻字されている。



壹里標



### 玖波村周辺（「行程記」部分）

黒川村を経て、恵川を渡り玖波宿の町並が描かれ、本陣が海に面して見える。町並を外れた東側に鉾の峠・一里塚が見られ大野村鳴川に至る。

参考文献

『大竹市史』(資料編第 1,2,3 巻、本篇第 1,2 巻) …大竹市  
『大竹市写真集ふるさと大竹』…大竹市教育委員会  
『藝州亀居城跡』(発掘調査報告書) …大竹市教育委員会  
『佐伯郡誌』(復刻版) …佐伯郡教育委員会  
『廿日市・大竹・巖島の歴史』…(株)郷土出版社

あとがき  
平成22年3月から、市広報に一年間連載いたしましたものに加筆・修正を施し、今回こうして冊子にまとめることができました。  
市民の皆様方が四季折々に西国街道を探訪される際の案内書として、ご活用くだされば幸いです。

平成24年3月 文化財審議会一同

新旧編集委員 (50音順)  
石田 雅春 岡野 正昭  
木村 武臣 木村 毅  
島崎 陽子 長門 彰男  
畠中 昶龍 望月 英範



② 楓園和田翁の碑

この碑には、天保(1836)年、和田吉左衛門が冠冠18歳で小方村庄屋職を引き継いだことやその人柄を讃える文が見られる。

しかし、特筆すべきは、吉左衛門が自然災害に苦しむ人々に対し、私財を投げうって救済の手を差し伸べただけではなく、広島の本藩に建議したり、社会を建て凶作に備えたりしたことである。又、長州の役で被災した人々を救うため、中断していた立戸沖の烏帽子新開の干拓工事を再開し、完成させたことである。

また、吉左衛門は俳句を嗜む文人でもあり、この碑の表題には俳号をあて「楓園味田翁」と刻まれている。



① 玖波隧道 (トンネル)

明治新政府が最も重視した施策の一つとして、大量輸送を必要とする道路網の整備に力が注がれた。難所の一つとされた「馬ためし」は、山から海に向かって半島のごとく張り出していたので、平坦化する近代道路に、明治11年県下初の隧道を掘削することで解決した。

しかし、昭和11年に拡張工事を完了した玖波隧道を現在東側から見ると、大きく崩落した跡がうかがえ、当時の隧道工事の難しさをうかがい知ることができる。



⑤ 心癒す“道しるべ”

油見から大竹に道路工事は進み、権現橋付近から通称本通りを経て、木野・石州道に繋がる。途中左に曲がり県境和木村に向かう。当時この地点は三(又)差路で、行き先を迷う人が多く、大正3年篤志家らにより、重厚な“道しるべ”が建之された。現在のように周辺状況の変化にもかかわらず、今も人々の心に良き時代を蘇らせている。

なお、昭和40年代市内道路網整備拡大の先駆けとして、現在は三(又)差路から交(又)差点へと姿を変えている。